

# ゼロ年代日本の教育言説にみるエネルギー概念の用法と意味

The Concept of Energy in 2000s' Educational Discourse in Japan

井谷 信彦

ITANI, Nobuhiko

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第7号 2022年

## The Concept of Energy in 2000s' Educational Discourse in Japan

井谷 信彦\*

Nobuhiko Itani\*

### 要旨

本論稿の課題は、ゼロ年代（西暦 2000 年～2009 年）の教育言説に見られる「エネルギー」という概念の調査・解釈をとおして、この概念の用法と意味を明らかにすることにある。このために本論稿は、この時期に刊行された教育関係の雑誌記事のうち「エネルギー」をタイトルに掲げているものを調査対象として、記事の趣旨とエネルギーとの関連、エネルギーという用語の定義、エネルギー現象についての描写を精査したうえで、従来の教育学の学術論文に見られるエネルギー概念の規定を立脚点として、個々の記事に用いられているエネルギー概念の解釈に取り組む。これによって、ゼロ年代の教育言説に見られるエネルギー概念の規定として、(I) 活動の原動力、(II) 無規定な活動性、(III) 心身の充足、(IV) 性格決定の要因という 4 つの意味内実が照明される。

キーワード：エネルギー，教育相談，学習意欲，エゴグラム，組織改革

### 1. 序論：本論稿の課題

#### 1-1. 課題の概要

本論稿の課題は、ゼロ年代（西暦 2000 年～2009 年）の教育言説に見られる「エネルギー」という概念の調査・解釈をとおして、この概念の用法と意味を明らかにすることにある。このために本論稿は、この時期に刊行された教育関係の雑誌記事のうち「エネルギー」をタイトルに掲げているものを調査対象として、記事の趣旨とエネルギーとの関連や、エネルギーという用語の定義、エネルギーという現象に関する描写などを精査したうえで、個々の記事で用いられている概念の意味の解釈に取り組む。これにより、ゼロ年代の教育言説のなかでエネルギーと呼ばれる現象がいかに関係されていたのか、一定の一般性をもつエネルギー概念の概念図を描くことができると期待される。教育に関わる言説のなかで無規定なまま用いられることの多いエネルギー概念の意味を見定め、エネルギーという現象の特徴を照明するための探索の端緒を築くことが、本論稿の中心課題である。

#### 1-2. エネルギーをめぐる従来の教育理論

教育をめぐる言説のなかでエネルギー (energy) という言葉が用いられる例としては、①物理学、化学、生物学など自然科学の各分野の術語として用いられる場合のほか、②これらの術語を踏まえて「エネルギー問題」や「エネルギー革命」のように理科や社会科などの各教科の主題として取りあげられる場合に加えて、③児童生徒のエネルギー、教師のエネルギー、学校のエネルギーといったように、科学用語や教科内容からは区別された意味で用いられているケースが散見される。本論稿が主題とするのは特に③の例に見られるようなかたちで理解・使用されているエネルギー概念である。①や②に見られるエネルギーという術語が各分野の概念連関に基づいて明確な規定を与えられているのに対して、③のような用例の場合にはエネルギーという言葉の定義を曖昧にしたまま用いられている

\* 教育学科准教授

ケースが多く見られる。教育言説のなかに見られる◎の例のようなエネルギー概念は、この無規定性ゆえに豊かな意味の広がりや自由な用法を認められている一方で、人々の耳目を惹くマジックワードとして無自覚に利用されているケースもあるように思われる。

英語の「energy」はラテン語の「energia」およびギリシャ語の「ἐνέργεια」（エネルギーイア）を起源とする。「energy」は一般に、①身体的・精神的な活動を行うための力強さ、努力、熱意や、②何かを行うために傾けられる身体的・精神的な努力、③機械を動かしたり熱を産み出したりするために用いられる燃料のような力の源泉、④物質や放射線がその質量、運動、電荷などによって仕事をするための能力といった意味で、日常会話から学術論文まで幅広く用いられている<sup>(1)</sup>。これらの語義と前段落に整理された「エネルギー」の用法を対照するなら、さしあたり語義③④は用法④と、語義①②は用法③と、類縁性が高いと見ることができる。

教育学の学術論文のなかでエネルギーと呼ばれる現象が扱われる場合には、当然ながら、上記④や③のように自然科学の各分野の術語や各教科の主題として言及されるケースが多い。これと比較すると、◎に見られるような児童生徒のエネルギー、教師のエネルギー、学校のエネルギーなどを分析の主題とする論稿は、かなり数が限られている。この◎の用例と類縁性の高いテーマを扱った教育学の著作としては、児童、生徒、教師、保護者などのもつ「心のエネルギー」あるいは「心的エネルギー」を主題とする、教育心理学や教科教育学などの諸論稿が貴重な先駆である。なかでも複数年にわたる蓄積と複数名による検証が見られる論稿群としては、①菅野純らによる「精神的充足」の測定を主題とする一連の論稿や、②中村重太らによる「学びの心的エネルギー」を主題とする諸論稿、および③エゴグラムを用いた性格診断を主題とする多数の論稿がある。以下本論稿は、特に断りのある箇所を除いてエネルギーという言葉は◎の意味で用いることにし、④③②を区別しなければならない場合には、「エネルギー④」「エネルギー③」「エネルギー②」のようなかたちで記すことにする。

教育心理学者の菅野純は、1989年刊行の『児童心理』に掲載された記事のなかで、子どもの不適応行動の要因を「精神的エネルギーの欠如」と「耐性の欠如」に見てとり、これらに照らして児童理解のための図式を示してみせた<sup>(2)</sup>。ここに菅野自身の学校教育相談の経験に基づいて提示された「精神的エネルギー」という概念は、2002年に刊行された綿井雅康との共著論文のなかで「精神的充足」へと置き換えられ、中学生・高校生の自己理解および自己教育を助ける心理評価尺度の基礎概念として採用されている<sup>(3)</sup>。菅野による精神的エネルギーの説明は「意欲の源」と簡明であり、精神的充足は「実際の行動を生起させ持続させるもの」とも説明されている<sup>(4)</sup>。菅野は子どもが精神的充足を得るための条件として、①安心感、②楽しい体験、③認められる体験という3つの要因に注目している<sup>(5)</sup>。

「精神的充足・社会的適応力」評価尺度（通称 KJQ）は上記2002年に実務教育出版から販売が開始されており<sup>(6)</sup>、以後も菅野と綿井を中心とする調査グループによる検証が重ねられ、教育相談や学級運営などへの活用事例も複数報告されてきている<sup>(7)</sup>。

理科教育学者の中村重太は、1994年刊行の『授業方法ハンドブック』の第4章「理科授業方法」のなかで、1989年告示の学習指導要領に示された「新しい学力観」にもとづいた、「新しい理科指導」の在りかたを提起している。このとき「学習指導のための条件」の1つとして提示されているのが、学習者を学習行動へと駆りたてる学習意欲としての「心的エネルギー」である<sup>(8)</sup>。別の論稿の説明によれば、ここでいう心的エネルギーとは「子どもが自らを学習にかりたて、学習を支え、方向づけ、最後まで継続させる推進力となるエネルギー」あるいは学習の「原動力」のことである<sup>(9)</sup>。中村らにより提起された心的エネルギーの概念は、前掲の『授業方法ハンドブック』以後、現職の教員らとの協働による調査をとおして、詳細に検証されてきている<sup>(10)</sup>。また、中村重太・稲垣浩俊（2004）は、

ピアジェやヴィゴツキーなど心理学者の理論を基礎として、これまで児童生徒へのアンケートや授業実践の分析から導き出されてきた心的エネルギーの概念に、発達心理学、認知心理学、行動心理学、社会心理学などの観点から根拠を与えている<sup>(11)</sup>。

「エゴグラム」(egograms)はアメリカの精神科医デュセイによって開発された性格診断の技法である。デュセイは、言動や対人関係の特徴から読み取られる個人の自我状態を、CP=批判的親、NP=養育的親、A=大人、FC=自由な子ども、AC=従順な子どもの5つに分類している。この5つ各々の自我状態に配分されている精神エネルギー(psychological energy)の高さを棒グラフで表したものがエゴグラムである。個々の自我状態に配分されるエネルギーの高低によって、個人の生きやすさ/生きづらさ、心身の好調/不調、対人関係の円満/不和などが生じるのだと考えられている<sup>(12)</sup>。元来は交流分析の理論にもとづく心理療法のために開発されたエゴグラムであるが、以後現在に至るまでに、医療、看護、教育など様々な分野に転用されてきている<sup>(13)</sup>。エゴグラムの教育への活用例としては、伊東里容の論稿のように児童、生徒、学生などの自己理解の向上のためにエゴグラムを利用したもの、森範行の論稿のように特定の取り組みの前後で対象者らのエゴグラムの変化を調査したもの、豊田弘司・多根井重晴の論稿のように特定の行動や個人の属性とエゴグラムとの関連を分析したものなど、幾つかの類型を見ることができる<sup>(14)</sup>。

以上、エネルギー概念が自然科学の術語や教科の用語とは区別された意味で用いられている使用例のうち、特に複数年にわたる蓄積と複数名による検証を経ているものを概観してきた。興味深いことに、各々の論稿がエネルギーとして捉えている現象は三者三様であり、エネルギー概念の用法や意味には明確な違いがある。菅野のいう「精神的充足」とは、安心感、楽しい体験、他者の承認によって蓄積される「意欲の源」のことである。中村が定義している「心的エネルギー」とは、児童らを学習活動へと駆りたて学習活動を支える「意欲」あるいは「原動力」のことをいう。エゴグラムの理論に見られる「精神エネルギー」とは、5つの自我状態へと配分されて、個人の性格や言動を決める要因である。これらの規定から「心の」や「学びの」などの修飾語による限定を取り除いて、身体や学び以外の活動にも開かれたエネルギー概念単体を見定めるなら、各々の概念規定から、「心身の充足」、「活動の原動力」、「性格決定の要因」という3つの意味内実を析出することができる。これら三者のエネルギー概念はいずれも、個人の活動や性格を規定している一種の「力」を意味しているが、概念の内実や射程に大小の相違が見られることは明白だろう。

### 1-3. 課題の再提示

こうして本論稿は改めてエネルギーと呼ばれる現象の多面性とエネルギー概念の多義性に直面することになる。教育学においてエネルギーと呼ばれる現象を主題とする従来の学術論文は、あるものは教育相談や授業実践の経験にもとづいて、あるものは心理学の理論にもとづいて、エネルギー概念に各々異なる規定を与えていた。経年による蓄積のない単発の学術論文や、論文以外の雑誌記事などにおける用法もあわせると、エネルギー概念の多義性はより広がりを見せるものと予測される。管見によるかぎり、これらの種々様々なエネルギー概念の用法や意味を整理するための探索は、これまでのところ公にされていない。

こうした課題意識にもとづいて次節以降では、単発の学術論文や一般の雑誌記事などにおける用例にも注目しながら、教育言説におけるエネルギー概念の用法と意味の内実を探索することにしたい。このとき、数多ある教育関係の雑誌記事すべてを調査対象とすることは困難であり、また社会の変化や学問の発展にもなつて概念連関も変化してゆくことが予想されるため、以下では特にゼロ年代＝

2000年～2009年の教育言説に的を絞って分析することにしたい。この時期の言説に目を向けるのには以下の3つの理由がある。①「エネルギー」という言葉をタイトルに掲げた教育関係の雑誌記事の数がこの時期に最も多く見られること、②本節に見てきた菅野ら・中村らによるエネルギーに主眼を置いた論稿も主としてこの時期に発表されていること、③「エゴグラム」をタイトルに含む教育関係の雑誌記事もこの時期に最も多く見られることの3つである<sup>(15)</sup>。教育とエネルギーの関係が最も注目を集めていたゼロ年代の雑誌記事に見られるこの概念の用法と意味を明らかにすることにより、この時代の教育言説のなかでエネルギーと呼ばれる現象がいかに理解されていたのかを照明することが、次節以降の課題である。

## 2. ゼロ年代の雑誌記事にみるエネルギー概念の用法

本節の課題は、ゼロ年代の教育関係の雑誌記事を対象とする調査をとおして、この年代の教育言説に見られるエネルギー概念の用法を明らかにすることにある。

### 2-1. 調査対象と調査方法

CiNii 論文検索にて、キーワード「教育」、タイトル「エネルギー」として得られた検索結果から、教育／教育学と直接関係のない記事およびエネルギー④やエネルギー⑤を主題とする記事を除外することによって、エネルギー③を主題とする141件の記事が得られた。このうちゼロ年代＝2000年～2009年に刊行された記事は56件だった(表1)。以下本節はこれらの記事に見られるエネルギー概念の用法を精査していく。最初に、①個々の記事の趣旨とエネルギーとの関係を領域ごとに整理する。次に、②各記事に見られるエネルギー概念の定義・説明を明らかにする。最後に、③エネルギー現象の所在や働きなどについての描写を整理する。以上の調査によって、ゼロ年代の教育言説に見られるエネルギー概念の意味を照明するための端緒が築かれることになることと期待される。なお、以下の議論のなかで調査対象の雑誌記事に言及するさいは表1中の番号で表示することにする。

表1 記事または特集のタイトルに「エネルギー」を含む教育関係の雑誌記事(2000年～2009年)

No.	著者	タイトル	掲載雑誌	刊行年
1	中村 重太 岩田 秀雄	理科の学習における子どもの主体的行動に関する研究 : 授業における心的エネルギーの喚起と教師のかかわり	福岡教育大学紀要 第4 分冊(49)	2000
2	大村 幸津江	気づきは感動, 感動はエネルギー(ママの反省)	子供にまなぶ家庭教育 (31)	2000
3	畠山 芳雄	伸びる人の本質: 能力開発原論⑥説得のエネルギーと技術	人材教育 12(1)	2000
4	中村 重太 稲垣 浩俊	学習の心的エネルギーを重視した理科授業の試み	教育実践研究(8)	2000
5	鳴澤 實	エネルギーの蓄積と借金の取り立て(巻頭言)	幼児の教育 99(4)	2000
6	倉沢 均	教師に豊かな感性とエネルギーが: 学習観と子供が変わる (「しらうめ活動」の実践から)	現代教育科学 43(7)	2000
7	中村 重太 鐘江 貴子	子どもの情意面を重視した理科学習指導のあり方 : 心的エネルギーを高める授業モデルの提案	福岡教育大学紀要 第3 分冊(50)	2001
8	大塚 則弘	教育研修のすすめ方で勝ち組になる処方箋 <sup>(10)</sup> 現場のエネルギーを奪わない研修	企業と人材 34(761)	2001

9	石子 順	文化・教育 手塚治虫の 21 世紀にむけたエネルギー	CEL (56)	2001
10	新富 康央	変革へのエネルギーを燃やし続ける：佐賀大学	現代の高等教育(431)	2001
11	潮崎 通康	"体験学習"は、人間性を回復し変革のエネルギーを生み出す	人材教育 13(9)	2001
12	辻 秀雄	よみがえる Human Theater (10) 落語教育に心血注ぐ。時代の語り部。還暦を過ぎてなお意気軒昂、そのエネルギーとパワーの魅力に迫る：落語家・三遊亭圓窓	よみがえる 13(10)	2001
13	右谷 浩	反転のエネルギー：『体験』と『触発』が生み出すもの	高校のひろば 46	2002
14	磯邊 厚子	スリランカ看護教育プログラムに参加して ：エネルギーリッシュな看護学生とともに*	看護教育 43(1)	2002
15	竹迫 和代	『創設場参画』のプロセスと推進エンジン ：人々の「内なるエネルギー」による創場をめざして	社会教育 57(5)	2002
16	梅林 裕美	地域住民の知識と経験が学校を変えるエネルギーに ：静岡県磐田市立磐田中部小学校協議会「泉の会」	総合教育技術 57(3)	2002
17	滝 一二三 白石 恵理子	A 君の活動・学習エネルギーの発見と通常学級での教育	障害者問題研究 30(2)	2002
18	稲垣 浩俊	子どもの「学びの心的エネルギー」を心理学的に位置づける一考察	日本科学教育学会研究会研究報告 18(3)	2003
19	原田 啓子	楽しさは、心のエネルギー!! ：裕太くんのこだわりの心と言葉を受け止めて	人間と教育 (39)	2003
20	折茂 和久	高等専門学校における学生のエネルギーと教育への期待	精密工学会誌 69(1)	2003
21	森井 洋子	遠回りでも支援の「場」を用意すること：教師にできるのは、もつれた糸をほぐす作業を本人が安心して行える「場」を用意することです(特集1 遠回りでも子どものエネルギーを引き出すかかわり)	月刊学校教育相談 17(3)	2003
22	和井田 節子	問題に直に向き合いたくない、だけどヒントが欲しい：子どもが問題を乗り越えるために、学校にしかできない対応があるように思います(特集1 遠回りでも子どものエネルギーを引き出すかかわり)	月刊学校教育相談 17(3)	2003
23	金子 由美子	よりよく見られたい、「つくり話」も人をささえる：「つくり話」を責めるのではなく、切ない気持ちを温かく受けとめてあげたかったので(特集1 遠回りでも子どものエネルギーを引き出すかかわり)	月刊学校教育相談 17(3)	2003
24	伊藤 修一	ときには見て見ぬふりすることも：「それくらい」のことが、とても難しく、容易にはできないことだってあるのだと思います(特集1 遠回りでも子どものエネルギーを引き出すかかわり)	月刊学校教育相談 17(3)	2003
25	中原 裕見子	こころのエネルギーを蓄える術を学ぶ：心理検査とワークブックを融合させた KJQ は、子どもも教師も保護者も元気してくれます	月刊学校教育相談 17(3)	2003
26	土田 達夫	若者にあるエネルギーの活用：開かれた学校を目指して	日本私学教育研究所紀要 38(1)	2003
27	無記名	教育の広場 教育新体制に立つ教師のいま：40代が中心の中小高校 望まれる若いエネルギーの注入 改革の切り札"民間人校長"に期待	ニューライフ 50(6)	2003
28	中村 重太	子どもの学習エネルギーを重視した理科授業の展開	理科の教育 52(8)	2003

29	菅野 純	菅野純の相談室：先生，一緒に考えましょう!(6)思春期の入り口にいる 子どもの心理：今月のキーセンテンス エネルギーの行き場を失う子ども たちと，"育児後"の生き方を問われる親たち	月刊学校教育相談 17(11)	2003
30	田中 博	スーパーサイエンスハイスクール ：わが校の実践(3)エネルギーに満ちた生徒を育てる	週刊教育資料 (818)	2003
31	永野 佑子	障害児に性教育を!!：性は生きるエネルギー 発達の要 そして人権	Sexuality (13)	2003
32	中村 重太 稲垣 浩俊	子どもの「学びの心的エネルギー」を看取る評価方法の開発 ：一枚ポートフォリオと VTR 分析の比較を通して	日本科学教育学会研究 会研究報告 19(2)	2004
33	大野 祥子 平山 順子 柏木 恵子	育児期男性の生活スタイルと自己の生き方への認識：仕事・家庭・個 人的活動へのエネルギー投入バランスの異なる 3 タイプの比較	発達研究 18	2004
34	中村 重太 稲垣 浩俊	「学びの心的エネルギー」に関する基礎的研究(1)	福岡教育大学紀要 第 4 分冊 (53)	2004
35	矢内 忠	先進校レポート/「副教本づくりを通して，教師のカリキュラム構成力 を培う」：愛知県犬山市の取り組みから 写真 1 カットにこだわる副教 本づくりが有形無形のエネルギーになる	総合教育技術 59(1)	2004
36	村上 龍 上杉 匡史 猪俣 理恵子 衛藤 俊明	座談会 村上龍と新採用教職員 閉塞感からの脱出 ：希望とエネルギーをつくりだすヒント	教育評論 (684)	2004
37	有賀 誠門	響く五感エネルギーの確保	21 世紀の音楽入門 7	2005
38	嶋崎 博嗣	幼稚園教育 幼児の生活と心身の健康 ：心身の健康を促す「繋がり」というエネルギーに着目して	初等教育資料 (790)	2005
39	高 賢一	学校復帰への意欲とエネルギーが蓄積された A さん	月刊学校教育相談 19(11)	2005
40	上條 恭子	その子のエネルギーや健康度に合わせた支援	月刊学校教育相談 19(11)	2005
41	市村 菜穂子	家庭・技術家庭 家庭実践へ向かう行動エネルギーを育む学習過程の工 夫：ジャガイモを使った調理実習を通して	教育実践研究 16	2006
42	佐野 健二	子供たちからもらうエネルギー	化学と教育 54(8)	2006
43	北條 博幸	事例で学ぶ教育相談的アプローチ救急センター(3) 自己肯定感の育成こそ成長のエネルギー	月刊生徒指導 36(7)	2006
44	無記名	今月の保健室訪問(107)素直な子どもたちからエネルギーをもらって 長野県東御市立祢津小学校	心とからだの健康 ：子どもの生きる力を 育む 11(2)	2007
45	武田 梓	女の子のエネルギーをどこへ向けるか	教育 57(7)	2007
46	和田 成	特集 がんばれ!公立校!! PTA の善意とエネルギーを学校経営に生かす には：「協働」意識を高めて信頼し合おう	教育ジャーナル 46(7)	2007
47	殿岡 翼	潮流 全国障害学生支援センター代表 殿岡翼氏に聞く(下) 自分のやりたいことにエネルギーを	週刊教育資料 (999)	2007

48	飯田 真理子 松本 純一郎 船越 正康 滝 省治	児童期の精神発達に関する性差について 2) UK 法による心的エネルギー水準=作業量の性別比較	日本体育学会大会 予稿集 58(0)	2007
49	山崎 弥生 三村 隆男	小学校キャリア教育の実践と指導・助言(12)"夢"実現への思いを内発的な学習エネルギーとして、主体的に生きる子どもの育成を目指して： 理科・算数科学習からはじめる「キャリア教育(生き方探求教育)」	進路指導 81(3)	2008
50	遠藤 正芳	実践! 校長塾(13)学校の個性を生かし、「学校力」を高める(2)公募校長 奮戦記<教職員のエネルギーを引き出す>	週刊教育資料 (1034)	2008
51	渡辺 研	子どもの背中をポンと押して、大人の仲間入り! ：生命のエネルギーに満ちた世代のツボはどこ？	教育ジャーナル 47(5)	2008
52	越智 典子	すぐあきらめる子にエネルギーの補給を	月刊学校教育相談 22(11)	2008
53	和田 美佐	同僚との関係からエネルギーを：アサーティブな自己表現のすすめ	月刊学校教育相談 22(13)	2008
54	千々布 敏弥	今日からできる元気な職場づくりのテクニック(第5回) コーチング(中)聞きたいことを聞くのではなく、相手の言いたいことを 聴く。そうすると相手のエネルギーが高まる	週刊教育資料(1076)	2009
55	吉田 順	親のかかわりはジワジワと子どもにエネルギーを補給する	月刊学校教育相談 23(11)	2009
56	青島 大輔	トレーナー教育の現場から(新連載) 学生たちのエネルギーを発揮できる場をつくる	月刊トレーニング・ジ ャーナル 31(10)	2009

※CiNii は「一」（長音記号）を判別しないため「エネルギー」も検索結果に含まれている。

## 2-2. 調査① 雑誌記事の趣旨とエネルギーとの関係

最初に、調査対象の雑誌記事の趣旨とエネルギー現象との関連を整理しておこう。

記事 1, 4, 6, 7, 18, 28, 30, 32, 34, 35, 38, 41, 49, 56 には、教科指導や幼児教育などの観点から、学習活動や教育活動などに関わる児童、生徒、学生、教師らのエネルギーの高揚または増進についての知見が記されている。記事 5, 19, 21, 22, 23, 24, 39, 40, 43, 52, 55 は、教育相談や生活指導などの観点から、当該の児童、生徒、学生らに欠乏しているエネルギーの補給または蓄積を主題としている。記事 8, 10, 11, 13, 15, 16, 46, 50 は、学校や企業といった組織の運営・改革に関わるエネルギーの増進や活用などに主眼を置いている。記事 12, 14, 17, 20, 26, 27 は、学習活動や教育活動などに関わる児童、生徒、学生、教師あるいは落語家らのエネルギーに関する認識、感嘆、活用への期待などを綴っている。記事 42, 44, 53, 54 は、学校教師や講座講師が児童生徒らから受けとるエネルギーや、教職員が同僚とのあいだで与えあうエネルギーなど、人々のあいだを行き交うエネルギーに論及している。記事 29 と 45 には、エネルギーの宛先を見つけれない児童が「いじめ」や「逸脱行動」に走ってしまう問題や、「悪いことばかり」に向けられた児童のエネルギーを「どこへ向けるか」という課題が提示されている。

このほか、記事 2 は主に家庭教育講座の学びから得られた感動のエネルギーに言及している。記事 3 は他者の説得のために心のエネルギーが要求されることを説いている。記事 9 は感性の重要性を訴

えかける手塚治虫の創作のエネルギーについて綴っている。記事 25 は菅野純の KJQ の教室における活用方法を紹介している。記事 31 は「性は生きるエネルギー」として障害児への性教育の重要性を説いている。記事 33 は育児期にある男性の生活スタイルをさまざまな活動への「エネルギー投入割合」を指標として調査している。記事 36 は学校現場の「希望とエネルギー」の回復をテーマとした座談会の記録である。記事 37 には「響き」をエネルギーとして捉える著者の音楽／音楽教育の実践と哲学が綴られている。記事 47 は自分の「やりたいこと」にエネルギーを傾けるのなら「サポートしてもらうことは恥ずかしいことではない」という、障害学生への言葉を記している。記事 48 は児童期の発達に見られる性差を UK 法による「心的エネルギー水準」の比較によって明らかにしている。記事 51 は「生命のエネルギーに満ちた」生徒に関わる中学校の特徴ある実践を紹介している。

この調査結果から、広く教育という営みに関わるさまざまな領域の記事において、エネルギーと呼ばれる現象が話題となっていることが見てとれる。第 1 節にみた各論者が主題としていた教育相談や教科の学習／指導や心理検査だけでなく、組織の運営、障害児童・学生の支援、社会教育などの領域においても、エネルギーは重要な役割をもった現象として論及されている。ここにはエネルギーと呼ばれる現象に関心を置いた教育言説の対象となる領域の広さを窺うことができる。

### 2-3. 調査② エネルギー概念の定義・説明

次に、個々の記事に見られるエネルギー概念の定義・説明を抽出してみよう。

中村重太らによる「心的エネルギー」の定義を別とすれば、エネルギーという用語の意味を明確に定義している記事は稀であった。唯一記事 3 だけが「強い心のエネルギー」を「何がなんでもそれを実現してみせるぞという堅い決意」として定義している。この「堅い決意」を我々を他者の説得へと駆りたてる一種の「力」として捉えてもよいとすれば、記事 3 の定義は「活動の原動力」という規定と類縁性が高いと見ることもできるだろう。他の記事には——明らかに学術論文の体裁をとっているものも含めて——エネルギーという用語の定義は見られなかった。なるほど、これらの記事の著者はエネルギー概念の意味を自明なもののみならず、詳細な説明を要するものではないと判断したのかもしれない。とはいえ、各々の記事が取り扱っている領域や著者が取り組んでいる問題などの違いによって、エネルギー概念の内実と射程に大小の差異が認められることも事実である。個々の記事におけるエネルギー概念の異同に関しては次節に改めて検証することにしよう。

このほか、厳密な定義とはいえないが「○○○はエネルギー」や「○○○というエネルギー」などのように、別の現象をエネルギーとして説明している記事が複数見られた。「○○○」に挿入されるのは、例えば、感動、「頑張りたい」という思い、楽しさ、性、響き、繋がり、種々の感情などである。これらの説明を個々の著者がエネルギー概念に好き勝手な意味を読み込んだものとみなして批判することもできるだろう。しかし別な視点から見ると、このように様々な現象を包摂することができる意味の開放性に、エネルギー概念の特徴があると捉えることもできる。したがって、上記のように別の現象をエネルギーによって／エネルギーとして説明している用例もまた、エネルギー現象がいかに関心されているのかを照明するうえで重要な示唆を含んでいるといえる。

なお、記事や特集のタイトルには「エネルギー」が掲げられているが、本文にはエネルギー概念の用例が見られない記事も、10 件以上見られた。これらの記事のなかには、「エネルギー」が耳目を集める便利なキーワードとして利用されているケースも、一定数あるものと推測される。

## 2-4. 調査③ エネルギー現象に関する描写

最後に、エネルギー現象の所在や働きなどについての描写を確認しておこう。

文脈から推測されるものを含めると調査対象 56 件のうち大半の記事が、「子ども」や「教職員」のように個人あるいは集団としての人間をエネルギーの所有者として扱っている。ここにはエネルギーが主に「人間の所有対象として」理解されている事実を窺い知ることができる。「大学」や「現場」や「組織」なども人間の集団として捉えたとすれば 56 件すべての記事が人間のエネルギーに言及していることになる。なかでも 40 件近くを占めているのが児童、生徒、学生などのエネルギーに論及している記事である。次いで多いのが教師のエネルギーを扱った記事 7 件、保護者のエネルギーを扱った記事 3 件であるから、児童、生徒、学生などのエネルギーへの関心の高さは明白だろう。唯一記事 37 だけが人間のみならず「自然、人間、動物、植物、作品、音楽」など「すべて」の存在者に「響き」としてのエネルギーの存在を認めている。

人間からエネルギーにたいする働きかけとして最も多く見られたのは、対象者のエネルギーを高揚あるいは増進させる働きかけである。対象者のエネルギーを高揚あるいは増進させる働きかけには、「喚起」や「醸成」などのように対象者の内側から引き出す方向のものと、「与える」や「補給」などのように対象者の外側から送りこむ方向のものが見られる。また、「生み出す」や「作り出す」のように元々エネルギーが無かった場所に新たに湧出させるような働きかけもあれば、「育む」や「高める」のように元々あったエネルギーを増強させるような働きかけも見られる。こうしたエネルギーの高揚あるいは増進に関する言葉遣いの違いは、それぞれの記事の著者のエネルギー観の差異のみならず、人間観や教育観などの差異をも示唆しているようで興味深い。

次に多く見られる働きかけはエネルギーの使用あるいは消費に関わるものである。これに関しても例えば「生かす」、「傾ける」、「割く」、「費やす」、「使う」、「投入する」など様々な表現が見られる。エネルギーの使用対象として最も多く言及されているのは児童生徒らによる学習活動であり、ほかにも学校や企業などの組織の改革や、教師らによる教育活動、児童生徒らが抱えている問題の解決などが取りあげられている。「いじめ」や「逸脱行動」や「悪いこと」などのいわゆる「問題行動」に向けられたエネルギーが話題になることもあるが稀である。エネルギーを学習活動、組織改革、教育活動などの前向きな活動に使用することが、エネルギーの高揚・増進に次いで、「エネルギー」をタイトルに掲げる記事の大きな関心の 1 つであることがわかる。

エネルギーの動きや働きをあらわす語句としては、「高まる」や「大きくなる」のように高揚または増進をあらわす語句や、「寄与する」や「力になる」のように所有者の活動への貢献をあらわす語句が見られた。このほか著者が児童生徒のエネルギーに癒されたこと、感心したこと、圧倒されたことが綴られた記事や、手塚治虫の創作のエネルギーが後世の人々に「感性の大事さを訴えかけて」と書いた記事もある。また児童、学生、保護者らのエネルギーを「すさまじい」や「すごい」や「想像以上だ」と形容している記事も見られた。とはいえ、ある個人や集団のエネルギーが他の個人や集団に与える影響を詳細に明らかにした記事は見られなかった。こうした用例からは、エネルギーという現象が第一に個人の活動に寄与するべきものとして、第二にこれによって他者を感じさせたり何かを訴えかけたりするものとして、体験され理解されていることが読み取れる。

## 3. 考察：ゼロ年代の教育関係の雑誌記事にみるエネルギー概念の意味

本節の課題は、第 2 節の一連の調査結果にもとづいて、第 1 節に検証された 3 つの概念規定を立脚点としながら、個々の記事に見られるエネルギー概念の意味を読み解くことである。

調査②によって明らかにされたように、「エネルギー」をタイトルとして掲げた教育関係の雑誌記事は、多くの場合にこのエネルギーという用語に定義を与えていない。また、エネルギー現象に関する記述が本文中には見られない記事も散見された。このため、エネルギー概念の意味を各記事の著者の説明によって「確認」することは、多くの記事において叶わないことになる。したがって、これらの雑誌記事に見られるエネルギー概念の意味を明らかにしようとするのであれば、個々の記事の趣旨やこの概念が使われている文脈に照らして意味を「解釈」することが求められる。次項以降の課題は、個々の記事の全体の趣旨に照らしてエネルギー概念の意味を読み解くことで、これを元にゼロ年代の教育言説に見られるエネルギー概念の概念図を描くことにある。

第1節において、従来の教育学の学術論文に見られるエネルギー概念の意味は、「心身の充足」と、「活動の原動力」と、「性格決定の要因」の3つに整理された。KJQの紹介を主眼とする記事25は、無論エネルギーを「精神的充足」として捉えている。児童の家庭実践への意欲を「行動エネルギー」と呼ぶ記事41は、エネルギーを「活動の原動力」として捉えている記事の典型である。エネルギーを明確に「性格決定の要因」として捉えている記事は調査対象のなかには見られなかった。個々の記事のエネルギー概念については次項以降に詳しく見ていくことにしよう。

### 3-1. 考察① 「心身の充足」と類縁性の高いエネルギー概念

記事21, 22, 23, 24は、「腑抜け」のようになった不登校の生徒(21)、「心の安定を欠いている」対人不安や摂食障害の生徒(22)、「つくり話」の世界に逃避をしている生徒(23)、仲違いをしている女兒ら複数の児童(24)などについて、教師による支援と児童生徒の変容を綴っている。これら4件の雑誌記事はいずれも、「遠回りでも子どものエネルギーを引き出すかわり」と題された特集に寄稿されたものであるが、個々の記事のタイトルや本文にはエネルギーという言葉は用いられていない。このため個々の著者がエネルギーという現象をどのように捉えているのかを記事の内容から読み解くことが求められる。4件の記事に共通しているのは、教師による児童生徒の深い承認や、安心・安全な環境の設定、楽しさを伴う活動の提案など、「精神的充足」の条件と重なりあう要因が、児童生徒の「エネルギーを引き出す」働きかけの特徴として見られる点である。加えて、これらの記事のなかでエネルギーの欠乏あるいは不足として捉えられているのは、「腑抜け」のような状態や、「心の安定」の欠如、現実の生活からの逃避、「普通の子」なら当然できることができないような状態などである。このためこれらの記事に見られるエネルギー概念は、特定の活動に向けられたエネルギーではなく、生活全般を支える「精神的充足」と高い類縁性をもっていると見ることができる。

このほか学校生活に馴染めない児童や、「すぐあきらめる」児童、「がんばりのきかない」児童などについて書かれた記事19, 52, 55などに見られるエネルギー概念にも類似の特徴が見られる。例えば、「すぐあきらめる子」と「あきらめない子」の違いを「エネルギー量」の問題として捉えた記事52には、他者から存在を認識されており配慮されていると思えることが「エネルギーを取り入れるための準備状態」であり、このような他者からの言葉、思い、行為を受け取ることによってエネルギーが蓄えられるのだと綴られている。著者はまた、「栄養バランスのとれた食物」が「体にも」「心にも」エネルギーを与えてくれるとして、心身両面を視野に入れたエネルギーの補給を説いている。以下の各項において論及される記事37や記事38にも身体のエネルギー(省エネ)に関する記述を見ることができる。ここには、「心のエネルギー」としての「精神的充足」という概念規定から「心の」という修飾による限定を取り去って、心身両面を射程に含めた「心身の充足」へと、エネルギー概念の射程を拡大するべきことが示唆されている。なるほど、身近な他者との関係のなかで蓄積される「心の」

エネルギーと同じように、食事や睡眠などによって補給される「身体の」エネルギーもまた、我々の生活全般を支える重要な基盤であり「意欲の源」であるといえるだろう。

### 3-2. 考察② 「活動の原動力」と類縁性の高いエネルギー概念

調査対象 56 件の雑誌記事のうちエネルギーが向かう対象となる活動が明確に限定されているものは、中村重太らによる記事 1, 4, 7, 18, 28, 32, 34 をはじめとして、記事 3 (説得)、記事 6, 17, 41, 49 (学習)、記事 9 (創作)、記事 10, 11, 13, 15, 16 (組織の運営・改革)、記事 35 (授業)、記事 20 (具体化) の 20 件である。いずれの場合も「学習エネルギー」や「変革のエネルギー」などのように、エネルギーが向かう宛先は特定の活動に終始限定されており、これが他の諸活動へと向けられることは想定されていない。このため、これらの記事で使われている「エネルギー」という用語は、所有者を特定の活動へと駆りたてる「意欲」または「原動力」という用語に、全体の趣旨や文脈などを損なうことなく置き換えることができる。以上のことから、上記 20 件の雑誌記事のなかで用いられているエネルギーという概念が、特定の活動に向けられた「活動の原動力」と親密な類縁性をもっているという解釈には、一定の正当性が認められてよいだろう。

とはいえまた、「心身の充足」と「活動の原動力」いずれに分類すべきか判断の困難な例もある。朝起きられず登学するのが困難な学生が「問題を克服」するためのエネルギーの蓄積について綴った記事 5 のほか、周囲の人々に「合わせすぎて疲れて」しまい不登校となった高校生の「学校復帰」へのエネルギーの蓄積について書かれた記事 39、「被害意識」と「自他否定感」ゆえに就学意志の希薄な高校生の「行動の変容 (改善・成長)」へのエネルギーについて綴った記事 43 などである。これら 3 件の記事の著者は、「問題の克服」や「学校復帰」や「行動の変容」など、エネルギーの向かう対象を明確に特定している。また仮に「エネルギー」を「原動力」に置き換えても文脈が損なわれることはなさそうである。けれどもまたこれらの記事で生徒・学生が抱えているとされる課題は、いずれも特定の活動に関わる困難であるというよりは、生活全般に関わるエネルギーの欠乏または不足という問題である。また、個々の記事に見られるエネルギーの蓄積の方途も、母親との親密な交流や、学校外の居場所の提供、教師の承認による自己受容感の醸成などに、重点が置かれている。したがって、これらの記事に見られるエネルギー概念には、「心身の充足」と重なりあう特徴と「活動の原動力」と重なりあう特徴の、両方をともに見てとることができるのである。

これらの雑誌記事においては、「心身の充足」と「活動の原動力」が厳密に区別されることなく 1 つに織りあわせられ、エネルギーという 1 つの現象として理解されていると捉えることができるだろう。著者によって概念の内実だけでなく射程の広さも異なっていることがわかる。このため、個々の記事の概念規定を「心身の充足」と「活動の原動力」いずれかに厳密に画定することよりも、これら両方の意味内実の「あいだ」にあたる領域の解像度を高めることが重要である。

### 3-3. 考察③ 「無規定な活動性」としてのエネルギー

「活動の原動力」と「心身の充足」の両方のエネルギー概念と密接な関連をもちながらも明確に異なっている「エネルギー」の用例が見られるのが記事 29, 33, 45 である。これらの記事に共通しているのは、なんらかの活動に取り組むことへの志向性はもっているが、対象となる活動が明確に特定されていない現象として、エネルギーが捉えられている点である。記事 29 は、学校生活にも慣れた 12 歳頃の児童のなかには、新奇な刺激も新たな挑戦もないまま、「エネルギーの行き場を失う」児童もいると綴っている。記事 33 は生活に関わる複数の活動への育児期男性の「エネルギーの投入割合」

を論文の主題としている。記事 45 は、児童が「エネルギーを爆発させるような場がない」なかで、彼／彼女が「本来」もっているエネルギーをいかに「成長のエネルギーに変えていけばいいのか」と、課題を提起している。これらの雑誌記事に見られるエネルギー概念は、なんらかの活動への志向性を備えている点で「精神的充足」とは異なっており、対象となる活動に関して無規定であるという点で「活動の原動力」とも違っており、ちょうど両者を架橋するような中間の位置を占めている。

このように理解されたエネルギー現象のことをいま仮に「無規定な活動性」と呼ぶことにしよう。上記以外に、記事 2, 8, 12, 26, 27, 30, 36, 40, 46, 47, 50, 51, 56 にも、この「無規定な活動性」と類縁性の高いエネルギー概念の用例を見ることができる。これらの記事に見られる用例の特徴は、振り向けられる対象としての活動が 1 つに限定されていない自由なエネルギーや、振り向けられるべき活動に活用されないまま保持されているエネルギーが想定されている点にある。無論ここでもこれらの記事に見られるエネルギー概念を「無規定な活動性」として全て同一視することは叶わない。上段の記事 29 や 45 のように児童のエネルギーの宛先が無規定であることを議論の発端としている記事もあれば、記事 27, 30, 36, 51 のようにエネルギーの向かう対象が漠然としている記事、記事 2, 8, 12, 26, 33, 40, 56 のようにエネルギーが振り向けられる対象として複数の活動・行動が想定されている記事、記事 46, 47, 50 のようにエネルギーが活用されるべき対象が明確に提示されている——だが活用されていない状態が想定されている——記事もある。したがって、これらの雑誌記事のなかで用いられているエネルギー概念は、さきほど「無規定な活動性」として提示された意味内実を共有しながらも、「心身の充足」および「活動の原動力」との距離が遠いものから近いものまで、大小の差異が織りなす緩やかなグラデーションを描いていると見ることができる。

#### 3-4. 考察④ 「性格決定の要因」としてのエネルギーへの関心

上述のようにエネルギーを直接に「性格決定の要因」として捉えている記事は調査対象のなかには見られなかった。とはいえ CiNii 論文検索によると、キーワードに「教育」と「エゴグラム」の両方を含む雑誌記事 215 件のうち約半数にのぼる 105 件がゼロ年代に刊行されている。エゴグラムによる性格診断の対象は児童や、生徒、大学生から学校の教職員まで様々であり、診断の目的も、対象者の自己理解の向上や、教育者に求められる資質の解明、自我状態と成績の関係の分析、職業適応と自我状態の関連の分析、スクールカウンセリング、児童・生徒・学生理解、学級運営、進路指導、不登校児童の支援など多岐にわたる。特に注目すべき点としては、表 1 にも複数の記事が採録されている『月刊学校教育相談』の第 15 巻第 1 号で「エゴグラムを面接に活かす」という特集が組まれており、この前後にも交流分析やエゴグラムを主題とする記事が複数発表されているのに加えて、今西一仁による「学校で使えるやさしい交流分析」という全 12 回の連載が第 19 巻第 5 号から第 20 巻第 4 号にかけて掲載されていることである<sup>(16)</sup>。こうした当時の状況からは、ゼロ年代の学校教育相談に関わる実践のなかで、性格決定の要因としてのエネルギーを主題とする交流分析やエゴグラムへの関心が、大きく高まっていたことを読み取ることができる。

加えて前項までに見てきた雑誌記事のなかにも、記事 5, 19, 24, 40, 43, 45, 55 などのように、児童生徒のエネルギーの変化を彼／彼女の言動や対人関係の変化と重ねあわせて描写している記事が複数見られる。例えば記事 24 は、周囲への気遣いができて「抜群の人気を誇って」いた女子児童が、友人と離れ離れになる釣りクラブを第一希望に選び、周囲への配慮を求められることがなくなって、逆に男子児童から気遣いを受けるようになり、「いつも生き生きと楽しそうに」活動していたようすを綴っている。記事 40 には、体調不良の母親が朝起きられないと「そのまま一緒に寝て」しまっていた

不登校の児童が、当初は適応指導教室での学習時間も母親と一緒にいて「べったり」であったのが、やがて友人もできて「明るく」なり、「いつも寝ている」母親への批判を口にするようになって、一人で通級できるようになり登校できるようになった経緯が紹介されている。また記事 43 は、校則違反や指導拒否などを繰り返していた生徒が、当初はクラスメイトとの活動に苦手意識を覚えて不参加であったのが、教師との関係をとおして自己肯定感を養い、やがてクラス対抗の合唱の舞台にも立てるようになり、クラスメイトや教師と心を開いて交流することができるようになったことを記している。言動や対人関係の特徴から個人の自我状態を読み取ろうとするエゴグラムの特徴に鑑みるなら、児童生徒らの言動や対人関係の変化とエネルギーの変化を重ねあわせた上記のような雑誌記事にも、エゴグラムの説くエネルギーと性格決定の密接な関係が示唆されていると見ることができるだろう。

### 3-5. 考察⑤ エネルギー概念の概念図

以上の分析結果にもとづいて (I) 活動の原動力、(II) 無規定な活動性、(III) 心身の充足、(IV) 性格決定の要因という 4 つの意味内実を含んだエネルギー概念を図示したのが図 1 である。

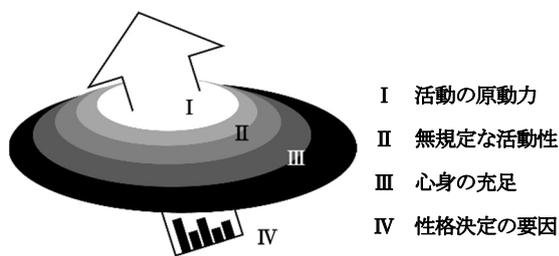


図 1 エネルギーの概念図

これによれば、活動へのエネルギーは (III) 心身の充足を基盤として (II) 無規定な活動性へと、(II) 無規定な活動性から (I) 活動の原動力へと高まりをみせ、こうして実現された活動中の言動や対人関係の特徴から (IV) 性格決定の要因が読み取られる。I・II・IIIのあいだには明確な境界線が存在するわけではなく、3つの意味内実はやや緩やかなグラデーションによって区別される。ゼロ年代の雑誌記事の著者のなかには、I・II・III・IVのうちいずれか1つだけを「エネルギー」と呼ぶ論者もいれば、複数にわたる領域を漠然と「エネルギー」と呼んでいる論者もいる。

### 3-6. 考察⑥ エネルギー概念の独特な規定

最後に、上掲の概念図に収まらない独特な概念規定を示している記事を読み解いておきたい。

記事 31 は「性は生きるエネルギー」として「性」とエネルギーを並置しているが、本文中に両者の関係に直接論及している箇所はない。とはいえ、障害をもつ中学生による性をめぐる「問題行動」を「発達欲求」として捉える視点や、性教育が子どもの「楽天的に生きる力」を育てるという視点は、性を「生きるエネルギー」として捉える見方を補完していると見ることができるだろう。単に性衝動のことをエネルギーと呼んでいるわけではなく、性への関心が発達への欲求であり重要な教育機会であるという知見に、著者の論考の主眼があるといえる。あえて前項の概念図との関連性に目を向けるなら、この「生きること」と成長発達の全般に関わるエネルギー概念は、I・II・III・IVいずれにも深く関わる、広い射程を備えていると見ることができそうである。

記事 37 は「響き」とエネルギーを並置している。音楽の演奏・指導を専門とする著者によれば人間が「生きていく」ということは自分を「響かす」ということである。また、「響き」は「自然、人間、

動物、植物、作品、音楽等、あらゆる『すべて』である」ともいわれる。あらゆる存在者が「響き」としてのエネルギーであるという見方は、運動、熱、質量など幅広い事象にエネルギーを認める自然科学の知見と重なるところもあり興味深い。

幼児の心身の健康を主題とする記事 38 は、幼稚園、家庭、地域などの関係者が「繋がる」ことで、「不満・不安・不信といった負のエネルギー」が「共感・勇気・連帯・愛といった正のエネルギー」に「転化しうる」と書いている。ここでは種々の感情が正・負のエネルギーとして理解されている。タイトルのなかで「繋がり」とエネルギーが並置されているのは後者の「正のエネルギー」を指したものでしょうか。著者によれば、上記のような「子どもを取り巻く人的環境」の「繋がり」が、幼児の「からだ」と“こころ”の健康の繋がりを保証するのだという。

記事 42 と 44 はいずれも児童生徒から「もらう」エネルギーを話題にしている。だが記事 44 には「いつも子どもたちからエネルギーをもらっています」という養護教諭の言葉が引かれているだけで詳細な説明は見られない。記事 42 は、企業による環境教育講座などの受講者である子どもたちから、講師である著者らが「エネルギーをもらって」いることへの感慨を綴っている。この記事には製造に使用されるエネルギーなど科学用語としての「エネルギー」への言及もあるが、これと子どもたちから受けとられたエネルギーとの関係は不明である。これら 2 件の記事に見られるエネルギーの用例は無規定ではあるが、人と人のあいだのエネルギーの交流が示唆されている点は興味深い。

記事 53 は、教師が「アサーティブな自己表現」をとおして同僚と「エネルギーを与え合えたら」という願いのもとづいて、自他の率直な想いを伝えあい聞きあうためのワークシートを紹介している。ここにも教師同士のエネルギーの交流に関する知見を見てとることができる。記事 54 も教師の同僚関係について、「相手の言いたいことを聴くこと」が「相手のエネルギーを高める」と説いているが、ここでは自他のあいだのエネルギーの交流は想定されていない。いずれも教師同士が互いの想いを聞きあうことの重要性を説いたこれら 2 つの記事の概念規定は、あえていうなら「心身の充足」という意味内実と類縁性が高いと見ることもできるかもしれない。

#### 4. 本論稿の帰結と今後の課題

以上本論稿は、ゼロ年代の教育関係の雑誌記事に見られるエネルギー概念の用例に関する調査結果にもとづいて、個々の記事の趣旨に照らしてこの概念の意味内実を明らかにしてきた。これにより、ゼロ年代の教育言説に見られるエネルギー概念の意味は、(I) 活動の原動力、(II) 無規定な活動性、(III) 心身の充足、(IV) 性格決定の要因という 4 つの意味内実の関係をあらわす概念図によって図示された。無論これはエネルギー概念の唯一絶対の規定ではない。現にこの概念図に収まらない独特の概念規定を示している記事も見られた。とはいえ、このように曲がりなりにも一定の一般性をもった概念図を描いてみることによって、これとの異同に照らして多種多様なエネルギー概念の用例と意味を検証するための、探索の端緒が築かれたことになる。このことはまた、異なる時代・異なる場所・異なる思想家などにおいて、エネルギーと呼ばれる現象がいかに関験され理解されてきたのかを明らかにするための探索に、最初の羅針盤を与えることにもなるだろう。教育言説に見られるエネルギー概念の由来や、ゼロ年代日本以外におけるこの概念の用法や意味、この概念が教育の実践／理論に与えてきた影響などについては、今後の課題として稿を改めて論考することにしたい。

## 注・引用文献

- (1) Cf. "energy" in Oxford Learner's Dictionaries (<https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/energy?q=energy>). 2021年8月4日最終閲覧。
- (2) 菅野純「『子ども理解』の構造」『児童心理』43(16), 1989, pp.90-96.
- (3) 菅野純・綿井雅康「『精神的充足・社会適応力』評価尺度の作成」『早稲田大学臨床心理学研究』2(1), 2002.
- (4) 菅野純「『子ども理解』の構造」『児童心理』43(16), 1989, p.93; 菅野純・綿井雅康「『精神的充足・社会適応力』評価尺度の作成」『早稲田大学臨床心理学研究』2(1), 2002, p.50.
- (5) 菅野純・綿井雅康「『精神的充足・社会適応力』評価尺度の作成」『早稲田大学臨床心理学研究』2(1), 2002, p.50.  
Cf. 菅野純「『子ども理解』の構造」『児童心理』43(16), 1989, p.93.
- (6) Cf. 菅野純グループ編『菅野純のKJQ』実務教育出版, 2002. この商品は中学校・高校向けの教材として販売されているものであり、個人向けの提供は行われておらず書誌も閲覧できない。このため上記の初出情報に関しては菅野純「教師のためのカウンセラートレーニング③心理教材の活用法〔1〕——心のエネルギーと社会的能力を計る」『児童心理』57(5), 2003, p.136を参照した。
- (7) 例えば, 綿井雅康・菅野純・蓑地一夫「『精神的充足・社会適応力』評価尺度の臨床・教育的検討(1): 生徒理解との関係について」『日本教育心理学会総会発表論文集』44(0), 2002, p.454に続く一連の検証作業や, 菅野純・増田みちよ・綿井雅康・蓑地一夫「『精神的充足・社会適応力』評価尺度を活用した教育相談の実践報告:(1) クラス集団の質的分析と集団的指導への活用の試み」『日本教育心理学会総会発表論文集』46(0), 2004, p.566に端を発する実践報告, さらに, 桂川泰典・加藤陽子・綿井雅康・中村有・菅野純「『精神的充足・社会適応力』評価尺度の学級経営への活用(1): 教師の実践的生徒理解との比較」『日本教育心理学会総会発表論文集』53(0), 2011, p.517を始めとする活用報告など, KJQの検証論文・実践報告は数多く公にされている。
- (8) 中村重太「理科授業方法」福岡教育大学教育実践研究指導センター(編)『授業方法ハンドブック』福岡教育大学教育実践研究指導センター, 1994, pp.35-39.
- (9) 中村重太・岩田秀雄「理科の学習における子どもの主体的行動に関する研究: 授業における心的エネルギーの喚起と教師のかかわり」『福岡教育大学紀要 第4分冊』49, 2000, p.340.
- (10) 例えば, 中村重太・岩田秀雄「理科の学習における子どもの主体的行動に関する研究: 授業における心的エネルギーの喚起と教師のかかわり」『福岡教育大学紀要 第4分冊』49, 2000, pp.339-349; 中村重太・稲垣浩俊「学習の心的エネルギーを重視した理科授業の試み」『教育実践研究』8, 2000, pp.41-51; 中村重太・鐘江貴子「子どもの情意面を重視した理科学習指導のあり方: 心的エネルギーを高める授業モデルの提案」『福岡教育大学紀要 第3分冊』50, 2001, pp.67-77; 中村重太・稲垣浩俊「子どもの『学びのエネルギー』を看取る評価方法の開発: 一枚ポートフォリオとVTR分析の比較を通して」『日本科学教育学会研究会研究報告』19(2), 2004, pp.93-96など。
- (11) 中村重太・稲垣浩俊「『学びの心的エネルギー』に関する基礎的研究(1)」『福岡教育大学紀要 第4分冊』53, 2004, pp.349-360. なおこの論文と下記の稲垣浩俊(2003)とのあいだには大幅な重複が見られることから, 前者は後者をもとにして加除・修正を施した論稿であると推察される。Cf. 稲垣浩俊「子どもの『学びの心的エネルギー』を心理学的に位置づける一考察」『日本科学教育学会研究会研究報告』13(3), 2003, pp.13-18.
- (12) Cf. Dusay, J. M., *Egograms*, Harper & Row, 1977, pp.1-136= 池見西次郎監修・新里里春訳『エゴグラム』創元社, 2020, pp.32-160. 引用・参照にあたっては上掲訳書を参考にしながら論文著者が翻訳をおこなった。
- (13) 新里里春・水野正憲・桂戴作・杉田峰康『交流分析とエゴグラム』チーム医療, 1986.
- (14) 伊東里容「保育者養成における自己理解の取り組み: 短期大学でのエゴグラムを用いた心理教育実践」『研究紀要』18, 2020, pp.93-100; 森範行「子育て支援プロジェクトをエゴグラムで評価する試みI」『学校臨床心理学研究』16, 2019, pp.19-25; 豊田弘司・多根井重晴「座席位置における年齢差と自我構造」『奈良教育大学紀要』67(1・

2), 2018, pp. 49-56.

- (15) ①③いずれも CiNii 論文検索を用いて各時代の雑誌記事の件数について調査を行った。古い記事ほど CiNii に登録されていない記事も多いため、教育関係の記事の総数にたいする割合もあわせて調べた。結果、①③とも記事の件数・割合いずれもゼロ年代が最多・最大だった。(2021年8月4日現在)
- (16) Cf. 「特集2 エゴグラムを面接に生かす」『月刊学校教育相談』15(12), 2001. 今西一仁の連載のなかで特にエゴグラムを主題とする記事としては、今西一仁「(第2回) 自分のエゴグラムをとってみよう」『月刊学校教育相談』19(6), 2005; 同「(第3回) エゴグラムを見ていくポイント」『月刊学校教育相談』19(7), 2005; 同「(第4回) エゴグラムを使ったかかわり技法」『月刊学校教育相談』19(8), 2005; 同「(第5回) エゴグラムを進路指導に生かす」『月刊学校教育相談』19(10), 2005がある。このほか『月刊学校教育相談』では本稿の調査対象外である2010年にも「エゴグラムで子ども理解とかかわりを深める」という特集が組まれている。

【付記】本稿はJSPS 科研費 JP20K02470 の助成を受けて実施された研究の成果の一部である。